

Y-PAC journal 2 境界のかたち 建築のかたち

Text by naoto ishizuka

今回は第2回のY-PACの撮影テーマであった「境界」に関連して、2つのアニメーション作品を取りあげる。「攻殻機動隊」と「新世紀エヴァンゲリオン」についてである。前者は士郎正宗のコミックが原作で、映画は押井守が監督を行った作品である。TV版はプロダクションI.G.によって2シーズン制作された。後者は庵野秀明が監督した、TV版26話と劇場版2作で完結の作品である。制作はGAINAX。攻殻機動隊は公開が、エヴァンゲリオンは放送開始が共に1995年である。

まず、攻殻機動隊の世界について概説する。人間の体の器官を機械に置き換える「義体化」という技術と、脳の情報を電子的に入出力する「脳電化」という技術が実用・普及している近未来の世界が舞台である。主人公・草薙素子は幼い頃に全身を義体化・脳電化した人物である。素子は日頃から身体と精神の不一致に悩まされる。本当に自分という人間は存在するのかと。記憶も電子的な情報に過ぎず、身体が取替えの可能な機械ならば、自分を自分と特定する存在（作中ではゴーストと呼ばれる）はどこに宿るのかと自答するのである。

次にエヴァンゲリオンについて概説する。14歳の少年・少女が「エヴァンゲリオン」なるロボットに乗り、謎の敵「使徒」を迎撃する物語である。使徒を迎撃できないと謎のカタストロフィ・サードインパクトが起こり、人類が滅亡するといわれている。そして、主人公はエヴァンゲリオンのパイロット・碓シンジである。話が進むと明らかになるのだが、シンジが「自分がココにいていい理由」を探し続けるという、およそ当初のSFロボット路線とは違った作品になっていく。パイロットとしてしか必要とされない自分は、戦うことをやめれば不要になる。戦わない自分は存在してはいけないのではないかと…。実際、TV版ラスト2話は碓シンジの心の中での自答を延々繰り返しSFロボットものとしての完結を放棄したラストを迎える。

2作品の扱う主題は「自と他の境界」であると言える。素子は自分のゴーストの存在を疑い、シンジは自分の存在理由を疑う。結末として、素子はある存在と融合を行い、自と他という境界を超えた存在を見つける可能性を得る。シンジは、自と他の境界（作中ではA.T.フィールドと呼ばれる）をなくし人類総体を個としての種に進化させる計画（人類補完計画）を受け入れず、自と他の境界を、自分の存在理由を自問し続けることを選ぶのである。

Y-PAC第2回講評会では、境界は概念と概念を分けるものであるという話が出た。聖と俗、内と外、あちらとこちら、自分とあなた。特に人間が引いてきた境界の多くは、自分の側とそうでないものを分けることであったと思う。これは、根本は自と他の境界の話である。建築も何かと何かに境界を引く作業であると思う。ある時は境界を強固に築き、またある時は境界をあいまいにし、境界をなくそうと勤める時もある。素子のように総体としての存在に進化の可能性を求め境界を越えていくか、シンジのようにそれでも境界を引き直し続けることを選ぶのか。境界のあり方を考える上での可能性をこの2作品は提示していると思うのである。

エヴァンゲリオン劇場版のラストでシンジに対して放たれたセリフ「気持ち悪っ」。この他者に対する違和感が自と他の境界を考える上で、何か重要なのではないかと僕個人としては思っている。

May 17, 2008